



AET1

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB

Monday 8 June 2015 9 to 12.00 pm

Paper J5

Modern Japanese texts 2

Answer **both** sections.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 page answer booklet

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

None

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

Section A

(1) Translate the following passage from an **unseen** text into English: [40 marks]

でんわ【電話】
 附加機能を加えれば加えるほど、コミュニケーションとしての道具から遠ざかって行く。

電話を使わなくなって半年が経つ。もと電話嫌い、在宅中も留守電にそのまま受話器をとらなかつたのだが――、半年前からその留守電も切つてしまつた。きっかけは別れた男からの電話だつた。電話が鳴りはじめたのは、深夜二時だつた。最初は無視していたのだが、あまり執拗しつやうに鳴るので誰かの訃報ふほうだと思つて、受話器をとつた。

「……もしもし」
 酔っているのか、薄ぼやけた声だつた。「話したいことがあるんだけど、逢えない?」
 私は沈黙した。彼とは憎悪を書き殴つた手紙を互いに交換して、別れたのだ。

「……元気でるか」彼はくりかえした。「あの、電話切ります」私は受話器を置いた。翌朝目を醒さますと、逢いたい、という彼からのメッセージが留守電に吹きこまれていた。風の便りに、彼が離婚したことは聞いていた。話したいというのはそのことだろうか。逢わなくなつてから一年も経つのに――。再生ボタンを押すのが怖くなり、電話コードを引き抜いた。電話は茎から折れた花のように頼りなげに見えた。ふと、逢つてみようかと犯罪現場に立ち戻る犯人の心境になつたが、やめた。いつまでも電話コードを引き抜いておくわけにもいかないので、留守電を応答専用（不在を知らせるアナウンスが流れるだけで、メッセージは吹きこむことができない）にし、通話できないようにした。

電話をとらないので私のことを無口でデリケートな作家だと思つているひとも多いらしい。

附加	additional	吹き込み	record
遠ざかる	grow distant from	風の便り	rumour
留守電	voice mail	茎	stem
受話器	receiver	頼りなげに	helplessly
執拗	persistently	犯罪現場	crime scene
訃報	report of death		

YU MIRI *Shigo jiten* (1996), pp. 79-80.

Section B

Translate **TWO** of the following passages from seen texts into English: [30 marks each]

(2)

右手に十勝岳が安すッぽいペンキ画の富士山のように、青空にクッキリ見えた。そこは高地だったので、反対の左手一帯はちよほど大きな風呂敷を皺にして広げたように、その起伏がズウと遠くまで見られた。その一つの皺の底を線が縫って、こっちに向ってだんだん上って来ている。釧路の方へ続いている鉄道だった。十勝川も見えている。子供が玩具にしたあとの針金のようだった。がところどころだけまぶゆくギラギラと光っていた。——「真夏」の「真昼」だった。遠慮のない大陸的なヤケに熱い太陽で、その辺から今にもポッポッと火が出そうに思われた。それで、その高地を崩していた土方は、まるで熱いお湯から飛び出してきたように汗まみれになり、フラフラになっていた。皆の眼はのぼせて、トロンとして、腐った鱧の眼のように赤く、よどんでいた。
*棒頭が一人走って行った。
もう一人がその後から走って行った。

百人近くの土方が急にどよめいた。「逃げたなあ！」
「何してる！ 馬鹿野郎、馬の骨！」
棒頭は殺気だった。誰かが向うでなぐられた。ボクン！ 直接に肉が打たれる音がした。
この時親分が馬でやってきた。二、三人の棒頭にピストルを渡すと、すぐ逃亡者を追いかけるように云った。
「馬鹿なことをしたもんだ」
「誰だろう？ すぐつかまる。したらまた犬が喜ぶ！ 眼下の線路を玩具のような客車が上りになっているこっちへ上ってくるのが見えた。疲れきったようなバッシュという音がきこえる。時々寒い朝の呼気のような白い煙を円くはきながら。」

KOBAYASHI Takiji, 'Hito o korosu inu', *Za Takiji* (1985), p. 3

(TURN OVER)

(3)

亡くなった父が福島市の公務員だったので、5歳から16歳のときにアイドルとしてデビューするまで、ずっと福島で育ちました。デビュー後、福島銀行のイメージガールにもなりました。福島との縁は切っても切れません。

原発問題に触れたのも、福島にいたるときでした。若くして亡くなった父は、福島原発へのMOX燃料導入の件で慎重姿勢を

取っていた当時の佐藤栄佐久知事を支持していました。「原発は危ないものだぞ」と父にずっと言い聞かされてきました。

「3・11」が起きたときも、ツイッターでの最初のつぶやきは、地震のことでも津波のことでもなく、「原発大丈夫？」でした。

事故が起きた直後、政府の発表は、しきりに「問題ない、大丈夫だ」と繰り返していました

が、福島にいる恩師や友だちから直接情報を集めたところ、第1原発はかなりやばい状況であることがわかりました。私は「死んだお父さんが言ったとおりになった」と感じました。政府の言っていることを「嘘なんじゃないか？」と思い、原発のことについて自分なりに知ったことや調べたことを発信していくことにしました。

その日、私が深夜まで情報発

Question 3 continued...

信を続けていると、「チバレイもネロ」というツイートがありました。発信者は山本太郎くんでした。政府のスポークスマンだった枝野幸男官房長官に対するネット上での「枝野ネロ」をもじったメッセージでしたが、太郎くんもネット上でバッシングを受けながら、反原発の立場で情報発信を続けています。私と同じ年です。私も、できることをやって行こう、どんどん調べていかなくてはと決め、ツイッターやフェイスブックでの発信を中心に、反原発・脱原発の立場で情報発信をしていくことにしたのです。

CHIBA REIKO. 'Teiko suru: Koe o ageru wa ga motto hirogaru koto o negatte', in KAIGO Yūichi (eds). *Han-genpatsu e no iyagarase zenkiroku: Genshiryoku-mura no hinsei o warau* (2014), pp. 90-92.

(TURN OVER)

(4)

寝室といえは睡眠の専用空間という考え方が一般的でしょう。けれど寝室は眠るための部屋なのでしょうか？

『寝室の文化史』によれば、フランス人がベッドで寝る以外に行うこととして、セックスが六三パーセント、読書が五三パーセント、音楽鑑賞が三一パーセント、朝食が二四パーセントなどとなっています。

フランス人は寝室が個室であって、そこは個人的な興味を満たす場所でもあるという意識が強いのではないかとおもいます。寝るだけでなく「居る」ための部屋でもある。つまり居室性をもとめているのです。

日本ではどうでしょうか。夫婦の寝室でこれだけ多様なことが行われているとおもえません。日本人はよくテレビを見る国民ですが、夫婦の寝

室にテレビがある家は少ない。この事実一つをとっても寝室を自分の興味を満たす場所として見ている人は少ないことがわかります。

息抜きはリビングルームで、寝室では眠るだけ、というのが一番多いパターンではないでしょうか。けれど子供が育ち盛りという家庭のリビングルームで読書や音楽鑑賞はむずかしいでしょう。せいぜいテレビと新聞で終わってしまうのではないかと。だとすると、私たちはそうした個人的に娯楽を楽しむ空間を住宅内にもっていないということになります。

ここで主寝室の使用者である夫婦、そして結婚について少し考えてみましょう。

夫婦がひとつの部屋で寝起きするという同室就寝は世界的に一般的な就寝形態です。欧米では例外なくそうです。もし別々の部屋で寝ているとすると、当事者はそれを隠そうとするでしょう。夫婦という人間関係に失敗していると思われるからです。アメリカならそのままに離婚しているでしょう。

Question 4 continued ...

シチズン時計が行った「夫婦の対話時間」の調査によると、二五年まえと比較して一日三〇分という答えが約三五パーセントから約二〇パーセントにへり、逆に一五分が約二〇パーセントから約三〇パーセントへと増加しています。なかでも注目されるのは、二五年まえは対話時間がまったくないという答えはなかったのですが、いまは約一〇パーセントもいるという事実です。一〇組に一組はまったく会話がないう夫婦なのです。単身赴任がふえたのでしょうか。それは二五年まえもありましたし、当時とくらべて通信手段も発達していることを考えると、夫婦の会話が圧倒的にへっていると考えるのが順当でしょう。

— 会話ゼロという状況はコミュニケーション不足というような生半可な事態ではありません。あえて口をきかないという意識が働かなければこうはなりません。しかしそのような「冷めた」関係を一つの寝室でつづけてい

くのはひどく骨の折れることでしょう。

FUJIWARA TOMOMI, *Sumai kara kazoku o miru* (2002), pp.100-103.

END OF PAPER

Page 7 of 7